
恋姫無双～長刀剣士の女（男）性～

青龍の剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜長刀剣士の女（男）性〜

【Nコード】

N7375P

【作者名】

青龍の剣

【あらすじ】

男性である龍崎 零は、女性として恋姫の世界に転生する。いろいろな出来事を経て、零は無事に生き残る事ができるのか？

第一話（前書き）

がんばって書きますので、よろしく願います。

後、これはほかの恋姫の作品とは違います。

第一話

「く！（この年で死ななきゃいけないんだ）」

ここはとある病院の一室、そこに龍崎 零は寝ていた。彼は、未知の病によりベットで寝たきりの生活を送っていた。しかし、その病状が悪化し、今、彼は病魔と必死に戦っている。

「（俺、このまま死ぬのかな。まあ、たくさん人を殺したし、これは罰かな）」

彼は、15の時に戦争に参加した。そこでたくさんの人を殺したが、その戦争の最中に今の病にかかり、今の状態になった。

「（くそ、頭が真っ白になって来た。まあ、出来れば次の人生は長生きしたもの……だ……………ぜ）」

龍崎はそう思いながら意識を失った。因みに年齢30歳

「おぎゃ〜！（これは一体どうなってるんだ〜！）」

こうして俺は第二の人生を歩み始めた。

第一話（後書き）

短いですがプロローグ的なものです。誤字や指摘がありましたら、感想とかに書いてください。

第二話（前書き）

こんにちは、青龍の剣です。いろいろと小説を書いているんですが、また新しいものを書きました。転生物は初めてですが、よろしくお願ひします。この話は、前の話から5年ほど年月がたったところから始まります。

第二話

あの衝撃から5年が経った。まあ今の状況を理解するのにも5年くらいかかったが、なぜ死んだ俺がいきなり赤ん坊になっているかは結局分からなかった。しかし、分かった事が三つくらいある。

一つ目は俺が今いるところが中国であることだ。それも三国志時代だという事が分かった。

二つ目がこの世界が私がいた時代とは違う世界である事が分かった。それは今の俺の母の名前を聞けば分かる。俺の母の名前は性は凌、名は操、字は甲把である。因みに今の俺の名前は性は凌、名は統、字は公績で、父は、性は凌、名は真、字は稜鵬である。さらに言う、と、一つ目の時代が分かったのもこの名前のおかげである。だって、凌操や凌統は三国志時代の武将だからね。

……話がそれたから戻す。さっきも言った通り、母親の名は凌操、つまり俺の世界では男性であるはずの凌操が女性になっているのだ。それともう一つ、この世界が違う世界だという確証がある。それはこの世界（多分、中国国内だけかもしれないが）には真名と呼ばれる。普通の名前とは違う神聖な名前がある事だ。私の場合は前世の名前と同じで零で、母親は燐火、父親は秦礪である。この二つの事からこの世界は私がいた時代とは違う世界だという事が分かる。

そして、三つ目なのだが、これは二つ目に関連してしかも自分ことなのだが……

「おい！ 零！ 何している！ 早く来い！」

「あ！ すみません！ お父様！」

おつと、父が呼んでいるみたいだから簡潔に話すしよう三つ目は、俺が女の子になってしまったことである。

作者 s a i d

今、少女になってしまった龍崎 零、もとい凌統は父親である凌真と共に家の近くにある道場に向かっている。理由は凌真が5歳になった凌統を鍛えるためである。因みに母親である凌操は仕事でいない。もともと凌操と凌真の出会い、隊長である凌操の元に凌真が副官として来た事から始まる。初めから引かれあつた二人は…（説明がめんどいので省略します）…なり凌操は子供である凌統を産んだ後から凌統が2歳になるまで家にいたが、招集命令が来て、兵士をやめた凌真に「5歳になったらその子を鍛えてほしい」と言った後、仕事に出た。そして、その言葉を忘れずにいた凌真は5歳になった凌統を鍛えるため、かつて凌操の勘を取り戻すために使っていた道場に向かっているわけだ。言い忘れていたが凌統の両親は二人とも武官で誰に仕えていたかは後々話す。いろいろと話しているうちに、二人は道場についたようだ。

「零、ここだ」

凌真はそう言う同道場の中に入って行った。凌統はその後が続いて中に入った。道場の中には槍や両刃剣など様々な武器があった。

「凌統、この中から好きな武器を持て、持ったら中央に來い」

「は、はい！」

凌操はそういう同道場の真ん中で仁王立ちをした。凌統はいろいろな武器を取ったがいいのがなかなか見つからない。

「うーん、どうしようかな？ ……あれ？ これって」

凌統はほかに何かないかとあたりを物色していると何かを見つけたようだ。

（おいおい、これって……）

凌統は見つけたそれを少し見た後、それを持ち、凌操の元に向かって走って行った。

「お父様！」

「どうしたんだ？ 零」

「お父様！ これはどこで見つけたんですか！？」

凌統が驚きながら持ってきたのは、2mともある刀だった。凌統がなぜ驚いているかと言うと、もともと前世（龍崎 零）の時に使っていた武器がこれなのである。ほとんどの人が戦争では銃を使うのだが、零の所属していた部隊は唯一、剣だけを使う特殊部隊である。その時に使っていたが凌統が持っている刀なのである。因みにその特殊部隊の任務は主に偵察や隠密などである。

話がそれたので本編に戻る。凌統の持つて来た武器を見て、それを見た凌真は少し考えた後、

「たしかそれは、母さんが持ってきたものだ。どこで手に入れたかは分からないがな」

「そうですか。 お父様、これを使ってもいいですか？」

「何？」

凌統の言った言葉に凌真は少し驚いた。

（今まで使っていた武器が一番使いやすいからな）

「この武器が一番にじっくりくるんです。 お願いします」

凌統はこういうと凌真はまた少し考えた後、

「いいだろう。しかし、ここでは存分に振れないだろう。だから外で稽古をつけるぞ」

「わかった！　ありがとう！　お父様！」

凌統はそう言いながら、刀を持ちながら凌真に頭を下げた。凌真はそれを見た後、

「それよりも早く外に出なさい。この道場ではその武器は使いずらいから裏で鍛錬を行うぞ」

「はい！　分かりました！　お父様」

凌統がそう言った後、二人は道場の裏手に向かうため道場を出た。

作者　s a i d　e n d

第二話（後書き）

こんな感じです。今回は零が主に使う武器を登場させてみました。
次の話ではまた時間を飛ばします。

優しい目で見てください。

感想や何か指摘がありましたらどんどん言ってきてください。

キャラ紹介

前世の名前 龍崎 零

現在の名前 性：凌 名：統 字：公績 真名：零

性別：女性（頭の中身は男性）

容姿：とあるの小さい時の神埼香織で髪は青

服装：基本は亜紗に似ていて、色は赤と白。袖には小刀数本が隠されている。

性格：すごい両親が大好き（前世では、小さい時に親を亡くしたから）。普段はあまり人と話さず、一人で鍛錬や勉強をしている事が多い。

戦では、自分の部隊をつけず単独行動が多い。そのたびに周瑜に怒られる。部隊の方も少数で構成されている。さらに、武将との戦闘中に熱くなると男口調になる。

武器：星雅（物干し刀） 靈薇、爛薇（二刀） 小刀（数本）

青「どうも！ この小説の作者、青龍の剣です」

凌「こんにちは、主人公の凌統 公績です。って、作者！」

青「どうした？」

凌「この前の話の口調をどうにかならないか！ 恥ずかしくてしょうがない！／＼」

青「いやゝ、ギャップがほしかったからそうしたんだ。後、心配するな。あの口調は両親の前でしかないから」

凌「本当か？（涙目＋上目つきい）」

青「今は女の子だからそんな目で見ないでくれ（すごく可愛い／＼）」

凌「？ どうした？ 顔を赤くして？ それより今の俺の両親についての紹介はまだなのか？」

青「え？ あ！ ごほん！ えゝ、零の両親についてだが凌操さんが出てから紹介する」

凌「そうか、じゃあ今日はこの辺でいいな」

青「ああ、そうだな」

凌「それじゃあ最後に……」

青・凌「これから恋姫無双／＼長刀剣士の女（男）性／＼をよろしくお願いします！」

キャラ紹介（後書き）

今回はこんな感じです。

因みにオリキャラは反董卓連合時の虎牢関まで出ません

だって、ほかの小説も書いてるからそこまで頭が回りません。

それでは！

第三話（前書き）

更新が遅れて申し訳ありません。

それではどうぞ！

第三話

「ふ、ふ、ふふ」

自分の武器を見つけてからまた五年が経った。まあ、その間はいろいろあった。山で狩りをしたり、畑で野菜なんかを育てたり、父と一緒に修行したりもした。そして今、俺は前世の時に好きだった音楽を口ずさみながら船の上で寝ていた。そもそもなぜ俺が船に乗っているかと言うと、あれは今から2週間前のこと……

く回想く

それは俺が山での狩りから帰って来た時のことだった。

俺が家に入ると父が手紙を読んでいるのが見えた。私は山で狩ってきたを台所の方に置きに向かおうとした時、

「ああ、零、帰って来たか。すまないがちょっとここにきなさい」

（……？ 何かあったのか？）

真剣な表情で俺の方を向いて呼びとめた父を見て、何か深刻な事が

あつたのかと思い、俺は持っていた物を近くの床に置き、振りかえっている父の前に正座した。父はこちらに体を向け、

「お前、母親に会いに行きたいか？」

これが事の始まりだった。父がこう言う事を言ったのは一通の手紙からだつた。父から見せてもらったその手紙には、父と母が仕えていた主、孫堅様がとある戦で戦死したこと。さらに、母の凌辱もその戦で重傷を負い、今は建業という場所で療養しているということが書いてあつた。

「お父様！ これは本当ですか！」

私は持っていたその手紙を床に叩きつけて言った。しかし、父は冷静に俺の目を見て

「……ああ」

と静かに呟いた。そして、そのまま……

「それで、会いに行くか？」

と俺に問いかけてきた。だが、父から聞かれるより前から手紙の内

容を見た時点で俺の答えは決まっていた。

「行きます!」

.....

父に問いかけに答えてから3日経った。俺は準備を整えてよいよいこの村から旅立つ時が来た。

「それじゃあ、お父様。いつてきます」

「ああ、燐火によろしく伝えてくれ」

「はい!」

俺はこうして俺の出発を見届けよう町の入り口までついてきた父に背を向けて、俺は母のいる建業に向けて旅立った。

凌真 said

「ふう、行ったか……（零は本当に強くなった。きっと孫策様の役に立つだろう）」

私は零に見せていない燐火の手紙のもう一枚を取り出してみた。そこには

『……………私はもう戦う事が出来ない。だから、零に私の後を継がせたいからこっちに送ってくれない。詳しい事は零と二人で話をするから……………』

このほかに呉の当主の孫堅様の後を孫策様が継いだことや燐火のけがの状態も書かれていた。

「（零、がんばれよ）」

と先ほど村を出て行きもう姿が見えない零を思い、空を見上げた。

凌真 said end

俺が村を出て、1週間が経過した。俺はなんとか港のある村についてた。ここからは船に乗って川を上れば建業に近い村まで行ける。と父から貰った地図にそう書かれていた。

「とりあえず、まずは腹ごしらえかな？」

俺は襲ってきた盗賊が持っていた物（武器だけだが）を武器で売ってその路銀で近くあった飲食店の中に入った。

「おじさん！ チャーシュー麺一つに餃子一つ！」

「あいよ！」

店に入っつてすぐに俺はカウンターみたいな席に座り、すぐに注文した。それから少し待っていると、

『おい、聞いたか……』

二席ほど離れた席に座っていた二人の男の話声が聞こえた。

『？ 聞いたって何をだ？』

『管輅って占い師の占いだ！』

『え、ええと…… なんだっけ？』

『は、ハ黒天を斬り裂いて、飛来する流星が二つ、その流星はそれぞれ天の御遣いを乗せ、すでに来ているもう一人の天の御遣いと共に乱世を鎮静する』 だよ！』

『あ、そうだったな。けどよ、それって信用できるのか？ 管輅って占い師、確かエセ占い師って話じゃなかったか？』

『そうだけだよ……』

(このご時世だ。そういう絵空事も信じちまうよな)

俺はそう思いながら、再び聞こうとした時、

「はいよ！ チャーシュー麺と餃子だよ！」

と後ろからおばちゃんがそう言っただけ俺の席にチャーシュー麺と餃子を置いた。俺は聞き耳をやめて食事になりつこうとした時、

「あんだ、武芸者なのかい？」

とさっき運んできてくれたおばちゃんがそう俺に話しかけてきた。

「そうだけど、それがどうしたの？」

「いや、あんだ。この町に来たってことは船に乗って建業に行こうって事でしょう？」

「？ そうだけど？」

「それだったら今は無理だよ」

「！ な、なんで！」

俺はびっくりして大声で聞くとおばちゃんは、

「それがね、ほら、このあたりで起こった戦で孫堅様がお亡くなりになったじゃない。孫堅様だけじゃない凌操様も重傷を負われたらしいわ」

「！！」

母が仕えていた主、孫堅様の事は母の手紙で知っていた。しかし、母のことはまったく知らなかった。

（まさか、母が、そんなことに……）

そんなことを考えている俺を尻目におばちゃんは続けた。

「その後、孫堅様の娘で長女の孫策様が跡を継いだんだけどね。内乱や騒乱が起こっちゃってね。仕方なしに今、孫策様は袁術様の客将として今にいたるのさ」

「それで、それと船が出せないのと同じ理由があるんですか？」

「ああ、実はここも元は孫堅様の領地だったんだけど、今は袁術の領地になっちまったんだよ。そしたら、税が上がったり、孫堅様より治安が悪くなっちまったりと言う風にことなつて、おかげでここに来るはずの商船や客船が来なくなっちまったのさ」

「なるほどそれで……」

「あ、でも……」

「……？（あ、麺が延びる）」

と俺とおばちゃんは何かを思い出したのか。おばちゃんは少し考えるしぐさをし、俺はチャーシュー麺をすすり始める。しばらくして、俺が餃子を完食して、チャーシュー麺も半分くらい食べたところに、おばちゃんが戻って来た。因みに、なぜ戻って来たという風に行つたかと言うと、チャーシュー麺を食べて少ししたくらいに何かを確認しにどこかへ行つていたようだ。

（というかあの人が出て行く時、厨房の方から「おかみ、どこ行くんですか！？」って聞こえたんだけど、あの人がおかみだったのか……）

と俺が考えていると、

「ちょっと、あなた！ さっき、港で聞いてきたんだけど二日後に建業に行く商船が出るらしいのよ。その船で用心棒を募集しているのよ。その船に用心棒として入れてもらえば建業まで連れて行つて

くれるらしいよ！」

「！ ほ、ほんほ！ へほ、ほんと！」

「食べながら言わないの！ 行儀わるいわよ！」

おかみにそう言われて俺はあわてて口に含んでいた物を飲み込んだ。

「それでそれは本当なんですか！」

「本当よ。だって、さっき確認してきたのよ」

「あ、ありがとうございます！」

「いいのよ。なんか貴方見てると凌操様のことを思い出してね……」

「え？ それってどういうことですか？」

「えっと、実は私ね。凌操様に助けられたことがあるのよ」

とおかみさんはそう言いながら自分の昔話を始めた。なんでもおかみさんが住んでいた村が盗賊に襲われた時に偶然にその村を母が訪れて、盗賊を退治したらしい。その後、盗賊に襲われたと聞きつけた孫堅様が母の武勇に惚れて、そのまま母を将に誘ったところ、母はそのまま孫堅様の将になったそうだ。

（まあ、それは最初に話してくれたことで、今は……）

「それでね！ この前、隣の奥さんが子供を産んだらしいのよ！……」

とこう言っただぐわいになぜか今はこの人の世間話に変わったので、仕方なく俺はその話を無視し、残りのチャーシュー麺を完食し、

「それじゃあ、代金はここに置いとくから。おかみさん、情報ありがとうございます！」

そう言っただ俺は代金を食べていた席に置き、店を出ようとした時、

「あ、ちょっと待ちな！」

「ん？」

「あんた、凌操様に似てるけど、何者なんだい？」

「……」

俺はその問いに少し足を止めて少し考えた後、

「私の性は凌、名は統、字は公績、凌操は私の母です。それじゃあ」

俺はそう言つと店を出て行つた。

おかみ s a i d

「へへ、彼女が凌統公績ねへ」

凌統公績と名乗つた少女が店を出て行つたあと、私は右手を頬につけていろいろと考えた後、

「彼女が転生した天の御遣いね。これは面白くなつてきたね」

と私は小さい声でそう言つた。なぜかと言つとこれは私しか知らない事だからね。偶然、噂の占い師、管輅に会つて娘から教えてくれたことだからだ。

「私もそろそろあの子も行く頃かしら？」

「おーい、おかみさん！ 向こうのテーブルの注文を受けてきてくれ！」

「はい！（もう、あなたってたー、おかみじゃなくて普通に真名で呼んでほしいわね）でも、管轄って占い師なんで家の娘にだけあの事を教えたのかしら？」

私はそう思いながら今、旅に出ている娘の事を思ったり思わなかったりしていたのだった。

おかみ s a i d e n d

俺が店を出てから港の方に行くと一つの看板が立ってあった。

「これがあの店のおかみさんが言っていたことか」

その看板には確かに二日後に出る船の用心棒を募集の云々が書いてあった。俺はその看板に書いてあった募集先に向かった。

「へー、結構いるな」

そこに入るといろいろな武器を持った武者達が集まっていた。俺がその中に入って行くと、その何人かが、

『おい、あそこ見ろよ』

『子供だぜ』

『へ、アマちゃんだぜ』

といろいろなところからそう言う声が聞こえた。俺はそれを気にせず壁の方に寄り掛かった。そして、しばらくが経ち、外が暗くなつた頃、試験開始時間になった。すると、一人の女性が武芸者達の前に立つた。その周りには兵士達がいくらか見えた。そして、

「私の名は黄蓋。今回の積み荷の護衛隊長とこの試験の試験官だ！これより、試験を開始する！試験内容はこれから我々の兵が私の後ろにある偽物の積み荷を奪いに来る。お前たちはその迎撃と積み荷の護衛、これが試験内容だ！合格の有無はお前たちの行動で判定させてもらう！試験時間は日が上るまでだ！では検討を祈る！」

黄蓋と名乗った女性と兵の数人が出て行くと同時に辺りは緊迫感に包まれ始めた。

「（あの人が黄蓋か、母さんの事について何か知ってるだろうか）けど、今はこの試験を乗り切るしかないか！」

俺も壁に寄り掛かったままだが、この緊迫感の中に入って行った。

第三話（後書き）

えゝ、なぜか前話でオリキャラは当分出ませんと言ったときながら出してしまいました。

ほんとにすいません！！

それと原作キャラの一人が出てきましたね。そろそろ一人だけでも原作キャラを出したいなゝ、思っていたら案外早く出せました。

まあ、この小説はその場の思いつきが大半なのでぐだぐだ感はないけど、ま、これからも精進していきます。

次回はよいよい戦闘です！けど、また予告を裏切るかもしれません。その時はすみません。

第四話

黄蓋さんが試験開始を宣言してから、3刻が過ぎた。今だ何も起こってはいないが荷が置いてある部屋にいる武者達の苛立ちはずつ膨れ上がって来ている。辺りからは罵声や苛立ちのせいか壁に拳をぶつける音も聞こえてきた。その時だった……、

「なんだこの音は！」

突然、大砲を撃ったような大きな音が響いてきた。その音を聞き武者達は次々と外に出て行き、部屋を俺以外は誰もいなくなつた。そういう俺はと言うと部屋からは出ず、壁に耳を当てて、外の様子を聞くことにした。すると、

『なんだ！ 今の音は！』

『おい！ あそこを見ろ！ 兵士がいるぞ！』

『あ、逃げるぞ！』

『あいつの後について行けば他の兵士たちもいるはずだ！ 追いかけるぞ！』

『ああ、何時間も待たされたんだ！ 行こうぜ！』

（そんなに待ってないだろう！ って言うか積み荷はどうするんだ

よ！)

俺の心の叫びは届かず、大勢の足音がだんだんと離れて行った。そして現在、この積み荷の部屋にいるのは二人だけとなった。

「はあゝ（あの人は人の話を聞いていたのかな？　いくら偽物でもこれを取られたら終わりなのにその持ち場を離れちゃだめだと思っただが）」

俺は一つため息を吐いた後、また壁に寄りかかりながら積み荷を気配を探るように軽く目を閉じた。

黄蓋 s a i d

「まったく、ふがない」

私はそう言うながらため息を吐いた。なぜため息を吐いたのかという、それは私の目の前にある気絶した武芸者達だ。この者たちは積み荷の警護を放棄し、おとりの兵を追って来た者たちだ。

「こんな短時間で集中力を切らし、まぎれていた私の兵の口車にまんまと乗せられるとわ……」

この試験の本質はどれだけ自分の判断で行動できるかを試すものだ。だから私は、この試験が始まる前に兵を何人かを忍び込ませた。そして、試験開始を宣言してから数刻ほど間をおいた後、音と囃兵を放ち、武者達がどのような行動をとるかを判断するつもりだったのだが、ほとんどのものが囃兵について行き、村の近くにあった森に誘い込んだ後、武者達を包囲、こうして全員気絶させたわけだ。

「これでは、あそこにいる者は誰もおらむな」

「黄蓋様〜！」

すると、そこにあの部屋にあった本物の積み荷を運ばせに向かわせた兵の一人が戻って来た。

「どうした？ 積み荷は全部、別の所に移動させたか？」

「は！ そ、それが……」

「我々が部屋に入ると一人の少女がおりまして、その少女に我が部隊の3分の2がやられました！」

その報告に私の兵たちは戸惑いを見せたが、

「ほう（おそらく、壁に寄り掛かっていた燐火に似た奴のことじゃろな）ふ、これは面白くなってきよったの」

私はその報告を受けながら、試験開始を宣言した時に壁に寄り掛かっていた少女のことを考えていた。

黄蓋 said end

「まったく（いきなりの襲撃は勘弁してほしい）」

俺は、そう言いながらさっきまでいた黄蓋さん達の兵が寝ていた（俺が気絶させたただけだが）場所を眺めていた。

「まさか、いきなり平然と入ってくるんだもの。びっくりした」

簡単な回想をいうと、俺がじつとおとなしくしてたらたくさんの足音が部屋の外から聞こえて来た。そして、その足音が部屋の前で止まったと思ったら、普通にドアを開けて入って来た。俺は兵に気付かれる前に奇襲をかけて兵の何人かを気絶させた。突然のことで驚

いて戸惑っている兵達を尻目に俺は次と倒して行つた。そして、部屋に入つて来た兵を全員気絶させた頃に外にいた兵が部屋の中で気絶している兵をおぶつたり、肩で担いだりして運んで行つた。

「ねえ、そう思つてでしょう。そこに隠れている誰かさん……」

俺は壁に寄りかかりながらそう言つた。しかし、他の人からこの部屋の中を見ればこの部屋には俺一人しかいないように見えるが、……何か動く音と共に天井の板の一部が勝手に外れ、そこから人が降りてきた。

（女の子？ 見る限り俺の今の年齢と同じ年くらいか？）

天井から降りてきたのは、俺と同じ年齢くらいの少女だった。

「……なぜわかつた？」

少女は俺を睨みつけながらそう言つた。

「あなたが黄蓋さんが来るよりも前にあそこ（天井）にいるのは分かつたわ。さらに、私が黄蓋さんの兵を倒していた時に貴方はあからさまに殺気を出していたしね」

「……」

俺がそう説明したが少女はその表情を変えず、ただ俺を見続け、俺と少女の間に沈黙が生じた。そして、しばらくすると、

「貴様、名は……」

「……」

「貴様の名はなんだ」

「……私は、名は凌統、字は公績。貴方は？」

「……我が名は甘寧、字は興霸」

すると、甘寧と名乗った少女はどこからか武器であろう剣を向けてきた。

「……構えろ、貴様の實力、確かめさせてもらっ」

「ふう、唐突ね……（まあ、ここはこの人の實力を確かめるにはちよつどいいな） いいわよ」

私はそう言つと背負っていた長い刀を抜かず、腰につけていた二刀

の内の一刀を抜いた。

「……行くぞ!!」

「来なさい!（鈴の甘寧の實力、見せてもらっぞ!）」

こうして、私、凌統公績と甘寧興霸の戦いが始まった。

第四話（後書き）

本当にすみませんでした！

本当に予告を裏切る結果になってしまい、本当にすみません！

次回は確実に戦闘が入ります！

こんなバカな作者ですが、どうかよろしくお願いします。

後、誤字や脱字があった場合、報告してくれたら幸いです。

それでは！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7375p/>

恋姫無双～長刀剣士の女（男）性～

2011年11月12日00時44分発行